

日本スポーツ社会学会研究員会企画研究セミナー

演題：スポーツ、スペクタクル、メガイベント

講師：ジョン・ホーン（早稲田大学）

司会：大沼義彦（日本女子大学）

日時：2019年11月22日（金）18：00-19：30

会場：明治大学駿河台キャンパス・リバティタワー1155教室

本セミナーでは、オリンピック研究、メガイベント研究の成果や課題を整理・検討することを目的に、当該分野で多くの著作があるジョン・ホーン先生をお迎えし、ご講演していただきました。

当日は、4点について述べられました。4つのうち前2者はご自身の研究関心や方法論について、後者の2つは現在のオリンピック研究からみえることと今後の課題についてでした。

第一に、ご自身のスポーツ・メガイベント研究の足跡についてお話されました。スポーツ・メガイベント研究の端緒はご自身が組織されたオリンピック研究プロジェクトにありましたが、本格的なスタートとなったのは、2002年 FIFA サッカーワールドカップ研究であったといいます。ホーン先生の問題関心は、基本的にスポーツに関する政治と、スポーツの中の政治にあります。スポーツや問題の捉え方については一つの軸を設定して説明されました。それはスポーツとは相争う（contested）文化であるという点です。例えば、日韓ワールドカップの著書（*“Japan, Korea and the 2002 World Cup”* Routledge, 2002）の表紙には、日本選手と韓国選手が一つのボールを競り合う写真が使われていました。なぜそうなのか、その含意とは何かについてわかりやすく解説していただきました。

二点目は、方法論に関するものです。ホーン先生自身は方法論的にはマルクス主義の見方に依拠しながらも（例えばスポーツを資本主義的消費文化としてとらえ分析した『消費文化の中のスポーツ（*Sport in Consumer Culture* Red Globe Press, 2005）』）、ある部分実用主義的に考える必要もあること、一つの観点のみで課題を解ききれものではないため多様な見方をする必要があることが述べられました。それはご自身が広く社会科学（人類学、政治学、経済学、歴史学、開発研究など）を学ばれてきたこと、その大切さ



を自覚しているからこそとされました。

三点目は、オリンピック研究やメガイイベント研究の現状についてです。ある図表を提示されました。一方にはオリンピックやメガイイベント賛成派、もう一方にはその反対派があるものです。ただ、賛成派といっても修正していけばよいとするものから、積極的に改革しようとするものまであり、また反対派の中にもオリンピックの民主化を唱えるものから、オリンピック自体をやめた方がよいとするものまで幅があります。そうした議論の布置を分節化して説明されました。現在の IOC バッハ会長は自らを改革者 (reformer) と位置づけ、オリンピック自体を変革してきている、といいます。それは、IOC の Agenda 20/20 や New Norm にも反映されているとのことでした。

こうした中、反対派のネットワークもグローバルな結びつきを持ってきていることも述べられました。反対運動が、ロンドン、ソチ、リオデジャネイロ、平昌、東京へと受け継がれていることや、次のパリ、北京、ロサンゼルスにもすでにつながっていることが示されました。

研究成果 (あるいは研究者自身) がどちらの人びとによって活用されているか、というものの大事な論点であるといいます。IOC 改革のため、反オリンピックのため、双方にとって研究成果はその根拠となっていくからです。Agenda 20/20 も数多くの批判への対応としてあるのだといいます。そして全体的にオリンピック大会のあり方は現に変わってきているわけです。

研究上の論点としては、①スポーツ・メガイイベントの定義、②スポーツ・メガイイベントに関する政治 (労働、人権、環境)、③レガシーとインパクト (負債、立ち退きと軍事化、機会費用)、④抵抗 (ローカルな政治がグローバルな力に直面すること) があるとされました。例えば労働という点では、ボランティアはブラック・ボランティアなのか、建築労働者不足による移民労働者の増加などがあります。また環境面では、マラソンと競歩競技会場を東京から札幌に移すなど温暖化の影響が出てきています。そのことは、今後のオリンピック開催都市をどのように、どこに決定するかや、競技会場の分散化など、将来のオリンピックのあり

方をも左右していくこととなります。こうした点から、2020年東京大会は、今後のオリンピック・パラリンピックのあり方を見定めていくテストイベントになるだろう、と述べられました。

最後にまとめとして、3点指摘されました。それは「否定的側面」を含めスポーツ・メガイイベントを継続・存続させていく政治、スポーツ・メガイイベントと環境問題



(例えば温暖化による開催会場の変更、競技会場の分散化、共同開催の模索など)、スポーツ・メガイベントの今後の可能性を考えることとなります。

フロアーからは、ちょうどラグビーワールドカップも終了したばかりでしたので、メガイベントと都市開発、ラグビーワールドカップをどのように捉えたらよいかなどの質問が出されました。スポーツ・メガイベントの定義ともかかわる問題なのですが、イベントしてラグビーワールドカップはティア2 (tier 2) であり、まだオリンピックやサッカーのワールドカップのティア1には及ばないこと、またティア2には冬季オリンピックも含まれるということが述べられました。したがって都市開発への影響の大きさや人びとや組織の動きには、オリンピックとラグビーワールドカップとの間には開きがあることが述べられました。そのほか、オリンピックを契機としたセキュリティの昂進など英国の状況などを問う質問も出されました。これについては、フーコー的な監視社会の問題としてどうとらえていくのか、軍事化という点も含めて検討していかなければならないと述べられました。

本研究セミナーには多く参加者がありました。研究室をあげて参加いただいたところもありました(筑波大学黄先生)。また、学会会員以外の方々も多数参加いただきました。限られた時間ではありましたが、スポーツやスポーツ・メガイベント、オリンピックについて示唆に富む知見を得られた会となりました。会場を用意していただいた中江先生はじめ、参加いただいた皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。

(文責：大沼義彦)